



「パリ通信 15号」

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成
二十五年三月
第十五号

< 2013年 3月 >

古賀 順子

祈りの春

3月3日お雛祭りを境に、パリにもようやく春の日差しが訪れました。この冬は雪や冷たい雨が多く、日照時間が例年の半分以下でした。待ち遠しかった春の太陽です。ところが一週間で冬に逆戻り。3月11日のフランスは北半分がすっぽり冬に包まれ、ノルマンディー地方は大雪となりました。

東日本大震災から2年が経ちます。「ル・モンド紙」も一面は福島原発事故のその後を特集しました。世界中がショックを受け、エネルギーの在り方を根本から見直す事故でした。一時は脱原発に進むかと思われた日本も、以前と変わらぬ稼働に戻っていること、日本もフランスも原子力発電の依存率をどのように減らしていくのか、2年前の事故から何も変わっていない現状が報告されています。地震国の日本がこれからどう対応していくのか、問い掛けしかできない記事です。簡単に解決策が見つかる問題ではありませんが、太陽光、風力発電、海底に眠るメタン凝結層利用など、新たなエネルギー開発が待たれます。それと同時に、東日本大震災で経験したことを機会ある毎に考えていく必要があると感じます。どこにいても、何ができるのかを考えることは大切です。フランスでも、日本を支援するイベントは続いています。パリ郊外クラマールでは、23/24日の二日間「福島の子供たちを支援する」コンサート、ダンス、習字や漫画のアトリエ、お寿司の出店など、大きなイベントが企画されています。パリで日仏アマチュア合唱団を創立し、日本歌曲をフランスに広める活動をされているソプラノ歌手押田杏里さんが、70名近いクラマール市の子供たちと日本の童謡を歌います。義援金も

大切な援助ですが、フランスの子供たちの歌声は、福島の子供たちに元気な励ましを送ってくれると思います。

日本の震災に関するニュースも、13日夜バチカン宮に白煙が炊かれ、ローマ法王が選出されると同時にフランスのメディアから消えました。高齢により、身体的にも精神的にも法王の職を正常に遂行できないことを理由に、今年2月末法王ベネディクト16世が辞任を発表しました。その後継者選別にヨーロッパ中が注目していました。二日間の短いコンクラーブの結果、大方の予想に反して選出されたのは、アルゼンチン出身の新法王フランシスコ1世(アッシジの聖フランチェスコに因む)。ローマ法王史上初めてヨーロッパ以外の国からの選出です。さらに、カトリックではなくイエズス会出身の法王です。2/3以上の合意に至るまで投票は何度も繰り返されるのですが、115票中90票以上を獲得した背景には、フランシスコ1世がアルゼンチンの貧しい社会層を助けてきたこと、ラテン・アメリカという新しい視点からの信仰の見直しが期待される今日のヨーロッパ事情があります。ローマ法王といえども、今や地球全体の再検討が求められているといえます。

その新ローマ法王フランシスコ1世は、「静かに祈りましょう」と就任の言葉を述べました。266代続いてきたカトリックの歴史は象徴的ですが、洋の東西、宗派を問わず、富める者も貧しい者も、人は昔から祈ってきました。人生に起こるさまざまな出来事を前に、少し立ち止まり、静かに祈ることで、人は尊い気持ちを持つことができます。パリは15日になってもまだ寒いですが、新しい命が再び開花するのも間もなくです。自然も人も生まれ変わる春、その春は祈りにふさわしいときではないでしょうか。